

B—63 近世以降における農民服飾の研究（第7報）
—被服構成上よりみた農民服飾—

和洋女大家政 鷹司 綸子

1. 労働着が近世におけるわが国一般庶民生活の中心衣服であったことはあらためていうまでもない。しかしそれが第2次世界大戦後急激に変化をおこし古来の姿は消滅しつつある今日、これを記録し留める急務を感じ、研究を続けてきた。その上外国文化の影響のもとに消長を示した都会の服飾からじかに生長しその機能に適應して完成されたと考えられるこの労働着を追求することから本邦文化の源流・伝播の一分野を探求することとしたく本研究を行なっている。

2. 例年本研究室施行の生活調査および諸記録を中心として研究をつづけているがなんといっても物の研究はその実測調査を併行することが必要である。しかしそれが消耗品であるために遺品を求めることがすでに困難になってきているが今回はその数少ない収蔵所の一つである文部省史料館の保管になるものの第一次調査を主として、東北地方の物に対して被服構成上から検討を加えることとした。

3. 今回は調査報告の形で行ないたい。